

# 1862年日本使節団がみたサンクト・ペテルブルグの イズレル興行施設と漕艇競技会大会

ワジム・クリモフ

1862年の使節団は、日の昇る国が幕府の主導していた鎖国を止め、開国してから最初の公式国家使節である。そのため、日本と条約を結んだ列強（露英仏独蘭）は、日本人に対し好意的な印象を抱かせるために可能なことをすべて行った。率先したのはフランスとイギリスで、両国が、2つの都市、江戸・大坂と3つの港をヨーロッパ人との自由貿易に開くことを延期する、開市開港延期問題を解決するため、38名からなる使節の来訪を主導した。

パリやロンドンで日本人が宿泊したのはとても瀟洒なホテルで、最高級の待遇を受け、「彼らにフランス式の観待とフランスの明らかな優越性を評価させるために〔下線はクリモフ〕」を期待して<sup>i</sup>、「最高に素晴らしい社会的個人的施設」を見せられ、とフランス紙「祖国【“Pays”】」は<sup>ii</sup>、ロシア内務省が発行するロシア政府系新聞「北方郵便」【“Северная почта”】を引用して、報じた<sup>(1)</sup>。

日本使節団が最初に訪問した国は、フランスであった。パリからマルセイユまで、前もって特別に、ナポレオン三世の特別代表であり、急使であるフラメン氏が「汽船ヒマラヤ号でアレクサンドリアから到着する使節を迎え入れるため、必要不可欠なことをするために」で滞在していた<sup>(2)</sup>。同船には「白地の真ん中に赤い円が描かれた日本の日の丸国旗が掲げられていた。」<sup>(3)</sup>マルセイユで日本使節団は、4月4日午前中、「町長や町の全官吏たちを従えた元老院議員ド・モパ【“сенатор Де Мопя”→Charlemagne Émile de Maupas(1818-1888) フランスの法律家にして政治家。第二帝政ナポレオン三世治下のパリ警視総監】を訪問した。正午、使節団は、トレビーズ男爵に伴われ、ノートルダム・ド・ラ・ガルド大聖堂の丘【холм “Notre-Dame de la Garde”】、プラド港、新港の見学に赴いた<sup>(4)</sup>。日本人に提供されたのは、快適さでは最高級のホテル「ホテル・ド・コロニー【“Hotel des Colonies”】」であった。「昨日〔4月3日、クリモフ注〕、日本人たちは「ユダヤ女たち」の公演を見たが、今日も再び、日本人のために演目が上演された。」<sup>(5)</sup>

このようにして、フランス政府は、日本使節到着の当初から、自国に対する最高の印象を与えようと努めた。日本人たちは生まれて初めてオペラを見た。彼らは技術や自然科学の分野での成果を知る機会ばかりではなく、ヨーロッパの音楽、オペラ、美術・工芸製品、図書館、さらにまた、興行施設を知る機会を得た。これに際し、賓客たちは、自然に、当然のように振舞おうとした。例を挙げると、新聞は次のような滑稽な事実を伝えた。「ホテルの表階段で、何人かの日本人は阿片を吸い、馬車の往来や通行する人々を監視していた警察官を思いっきり驚愕させた。」と<sup>(6)</sup>。

英国では同様に「日本使節は…英国社会で歓迎された。日本人にはロンドンの素晴らしい建物と名所が見せられた」<sup>(7)</sup>

おかげで、この「歓迎競争中」で、ロシアとしてもこの「歓迎競争」に加わる以外は選択肢はなかったが、この点で少なからぬ成功を取めたのであった。

ロシア政府もまたヨーロッパ人のもてなしにひけを取るまいとした。両国にとって大切な外交

交渉以外にも、ロシア人外交官や高官たちが、毎晩、日本人を劇場や遊興施設に連れて行った。そのひとつは特に言及にあたいする。サンクト・ペテルブルグに到着後すぐに、日本使節団は、興行師イヴァン・イヴァノヴィチ（ヨハン・リュツィウス）・イズレル（1811-1877）の人工鉱泉、「イズレル園」と名付けられたところを訪れた。開園は1834年、ノーヴォエ・ジェレブニヤ【新村の意】においてである。そこには、鉄泉、塩泉、アルカリ泉、硫黄泉等、ヨーロッパの有名な温泉を模した24-30種類の鉱泉があった。現在、この場所はプリモールスキー大通り（旧称ノヴォジェレブンスカヤ・ナベリジュナヤ）の地下鉄の駅「チョールナヤ・レーチカ」近くに当たる。

この出来事は首都の新聞が放ってはおかなかった。政府系新聞「北方郵便」【“Северная почта”】は「日本人I.I.イズレルに」と題し、次のように伝えた。

「8月9日木曜日、日本人はI.I.イズレルの寄付興行という形で、人工鉱泉施設で行われたお祭騒ぎを見物した。日本人はサンクト・ペテルブルグの軍務総督<sup>(8)</sup>、警察署長<sup>(9)</sup>、その他、日本使節団に関し外務省指揮下で常に職務に付く面々に伴われ、午後8時頃到着。入場料もコンサート・ホール部分への席料も相当高いにもかかわらず、来訪者たちは、多数にわたった。日本使節団が到着すると、園は見物人であふれかえり、彼らは、常に、ぞろぞろと、日本人たちに、くっついて歩くのであった。日本人は園内を散歩すると、通常上演のなされる舞台の先にあるホールに向かい、日本人のために特別に用意されたさまざまな種類の菓子類の載るテーブルに座った。

2人の使節、従者の内上席の者は総督とともに別のテーブルに座った。この最初の饗宴が終わった後、日本人は劇場に招かれ、上階の左右の棧敷席に案内された。コンサートはジプシーの歌に始まったが、異國の客たちの様子から察するに、ジプシーの踊りが気に入ったらしい。日本人のひとり、演目の最中ずっと鉛筆でなにやら書きつけていたし、他の者たちは、正使を除いて、舞台を見ながら、笑みを見せ、互いに何かを話し合い、おそらく、歌と踊りにより感じた印象を語り合っていたのだろう。上演の第一部が終わった時、日本人たちは、棧敷席から出、再び、饗宴の席が用意されたホールに戻ったが、園に設えられた舞台上で踊っていた、ヨハンセン家の年若い踊り子たちに会いたがった。日本人たちは踊り子たちに金銭の贈り物をしたとのことであった。I.I.イズレルは、客をもてなす側の主として、菓子をのせた様々な皿を運び、この心配りにより、日本人に大きな満足を与えたようであった。日本人は、饗宴の席にいた多くの人々に、日本語とフランス語で書かれた名刺を配った。饗宴の第二席の後、使節と従者たちは、再び、棧敷席に戻り、演目が終わるまでそこにいた。彼らが軽馬車に乗るため退出する時、I.I.イズレルは、軍楽隊が表階段まで彼らを送るよう指示した。催し物の第一部と第二部の間、大規模な火花が催されたが、日本人たちもそれを見物した。

この機会を利用して、サンクト・ペテルブルグの公衆たちに有名で人気者であるI.I.イズレルが造り上げている人工鉱泉施設に設えられたコンサートや舞台に、毎日出場している素晴らしいアーティストたちに言及したい。これらのアーティストの間で疑いなく、第一位は、スイス人で歌手デケル・シェンカー一家である。デケル・シェンカとその妹、フレデリカ・ケーレルは、ヨーロッパのどんな劇場でも通用する。この2人の歌手は素晴らしい声と完成された技能を持っている。2人の歌は素晴らしい芸術的完成度と類希な好感度があり、それはまた、マリア・ケーレルの声にも特際立っている。デケル・シェンカ氏率いるスイス人一家コーラスは、完璧の域に達している。歌手の中で公衆の注目を集めているのは、ロマンス「folichon」【「陽気な」】。ただし、しばしば否定で使う。「つまらん奴」と「viens donc」【「すぐに来て」】で常にアンコールを数回も受

ける「フランス夫人」【あだ名】、および、わがミハイロフ劇場にとり、実に良い掘り出し物である風刺コミック歌手【комик charge】バチスト氏である。モスクワのイヴァン・ヴァシーリエフとフォードル・ソコロフのモスクワ・ジプシー・コーラスのことに改めて触れる必要はなかろう。このコーラスは非常に有名で、既に、名声を博している。マーニャ、グルーシャ、マーシャの声、彼女たちの歌い方は、音楽に関して多少なりとも知識を有する人々皆に気に入り、賞賛させる。

I. I. イズレルの祭典について語ることを終えるにあたり我々としては、ビュッフェを訪れることが主たる目的である夏の郊外娯楽のような大混雑の中で、誰もが判かるような極めて困難な任務を遂行するに際しての、警察の並々ならぬ配慮と範とすべき丁寧さについては、言明しておかなくてはならない。なお、花火の際に多大な効果をもたらす30の大小の噴水付きの人口滝の開始が4時であることの周知を失念したのは、我々の落ち度である。

(報告済み)

編集補佐 M. レベトキン<sup>(10)</sup>

しかし、サンクト・ペテルブルグでは、モスクワ・ジプシー・コーラスに付き、誰もが無条件に感嘆の念を示したわけではなかった。

「北方郵便【Северная почта】」紙の記者が書いているように、ジプシーの歌い手に付き、賓客たちが専門的に判断するだけの経験を持ち合わせておらず、「日本人の客人たちはジプシーの踊りが気に入った」としても、競争紙の鋭い批評者は「北方郵便」紙とは、正反対の意見を表明する機会を逃さなかった。

8月21日(火曜日)発行の「サンクト・ペテルブルグ報知【“Санкт-Петербургские ведомости”】」(第181号)に「音楽家のための覚え書き」と題した次のような内容の辛辣な記事が掲載された。

「『北方郵便』第175号の「I. I. イズレルにおける日本人」と題した記事の中の次のような一節が目にとまった。「モスクワのイヴァン・ヴァシーリエフとフォードル・ソコロフのモスクワ・ジプシー・コーラスのことに改めて触れる必要はなかろう。マーニャ、グルーシャ、マーシャの声、彼女たちの歌い方は、音楽に関して多少なりとも知識を有する人々皆に気に入り、賞賛させる」。これは誤植ではなかろうか。記事の筆者は、「多少なりとも知識を有する」という部分を、否定の意味の「ほんの僅かな知識すらも持っていない」としたかったのではなかろうか？ あるいは、もしかしたら、この「ほんの僅かな知識を有する」という表現は、ジプシーの歌声に感嘆することの出来るのは、音楽について「ほんのわずかな知識しか持っていない」ような音楽狂のみ、という意味の皮肉に解する必要があるのかも知れない。だが、真に、優雅な芸術としての歌唱を理解し、尊重する人々は、おそらく、ジプシーの歌を構成するあの甲高い声、叫び声やうなり声に感嘆することは、できないであろう。もしこれが誤植ではなく、わが尊敬すべき記事の筆者が、お引きずりのジプシー女のミューズを崇拜しない人間から、積極的に、音楽の良識とセンスを奪おうとしているのであればとんでもない話であり、この場合、優雅な歌唱の模範であった音楽界の歴史上の活動家たちの伝説は消えてしまえということになる。そうなってしまったら、いったい何のために、正真正銘の教師に金を払う必要があるのだということになる！ 我々の前には、マーニャやグルーシャ、マーシャのような歌い手たちがいる。これら、真の歌の模範たる彼女たちは、我々に、歌い方もセンスも、音楽の理解も、すべて与えてくれるであろうし、挙げ

句また、歌のレッスン以外にも、レッスンでの進歩に対し、別種の楽しみをも提供してくれるのであろう。

I. I. イズレルの即興野外舞台からデケル・シェンクとその妹のフレデリック・ケーレルのような歌手を引き抜いたヨーロッパのどこかの劇場が、どれだけの利益を得ているかについては、改めてここで事細かく述べることはしない。だが、彼らは、上掲の記事の筆者の表現によれば、2人とも「素晴らしい声の持ち主で見事に鍛え上げられた」歌手である。

熱心なる訪問者ミネラロク<sup>(11)</sup>

首都の硬派の雑誌である「祖国雑記」【“Отечественные записки”】はこの出来事を以下のように記した。

「現今、サンクト・ペテルブルグには、日本人たちが訪れており、彼らは住民たちの興味を誘っている。宮廷での饗応の後、彼らは、わが珍所、驚所、そして公議會を訪れる予定である。その他にも、日本人のために素晴らしい祭典を用意したイヴァン・イヴァノヴィチ・イズレルの鉱泉にも行った。料金は驚くほど高額に設定された。劇場の栈敷席は15-30ルーブルに、上平土間席は最高で8ルーブル、等々である。

一方で、この件でI. I. イズレルを非難することはできない。実際問題、入場料が高額であることは彼の意志ではないからである。入場料は、直段が安いと下層の民衆が集まり、鉱泉でしばしば生じる醜態から日本人を守るために、高く設定されたのだ。

このように、日本人は今や人気者で、集まった群衆に今か今かと待たれており、皇帝村での競馬に日本人が来訪するとの噂に、8月12日、同所に大群衆が集まったことはなんら不思議はない。ここまで人々が集まったことは、最近とんとなないほどの好天も特に影響した<sup>(12)</sup>。

かくして、日本使節団が、何らかの公共の場にやってくると、間違いなく、直ちに大勢の人々が集まり、催し物の成功、すなわち大きな利益がもたらされるのであった。

しかしながら、「祖国雑記」の「現代政治」欄【“Современная политика”】の総責任者でコラム「すべて、そして何も」の筆者は、異常に高い価格設定は、遊興施設にやってくる日本人を一目見ようと大挙して押し寄せてくる無教育な大衆の無礼から客たちを守るためのものであり、その意味でI. I. イズレルは正しかったとしている。とりわけ、この評論家は次のように書いている。

「より裕福で、多少なりとも、礼儀正しく振舞うことに慣れている人々が集まるのではないかとの期待を込めて、人工鉱泉施設で日本人を醜聞から守るための唯一の手段として、不合理なほどの高額に入場料を設定することを考えついたとしても何ら驚くにあたらない。

これはいったい何なのか？ 憂うべきことなのか？ それとも滑稽なことか？」<sup>(13)</sup>

21世紀初頭の今日、学識ある人たちの中でさえ、イズレル園のことを耳にしたことがある、あるいは、何らかの知識がある人々を探すことは困難である。しかし当時は、この園はペテルブルグの裕福な人たちの愛好する場所のひとつであった。イズレル園についてM. I. プィリャエフはその著『ペテルブルグ近郊の忘れられた過去』の中で手短かに記している<sup>(14)</sup>。最初はストロガノフ伯爵の所有地に19世紀30年代に人工鉱泉施設にホールがあり<sup>(15)</sup>、週2回楽団が演奏をしていた。貴族たちは自分の馬車でやってくると、そのままステージの前に列をなした。

40年代の終わりにイズレルがこの施設を借り受け、並木道とホールのある園全体を高い垣で囲

〈44〉 1862年日本使節団がみたサンクト・ペテルブルグのイズレル興行施設と漕艇競技会大会（クリモフ）

み、入場料を取り始めた。園では、当時有名だったイヴァン・グングリ指揮の楽団の演奏、人気のあったイヴァン・ヴァシーリエフのジプシー・コーラスの歌、曲芸一座の出し物があり、当時流行だった活人画の興行も始められ、大型花火やイルミネーション、その他の余興花火が行われ、気球も打ち上げられた。1862年フランスの大衆歌手を招聘し、1869年にはまた園ではオッフエンバッハのオペレッタ「ラ・ペリコール【“La Perichole”】」が初めて上演された。皇帝ニコライ一世は鉱泉を訪れ、感謝と功の印に私的贈り物として3,000ルーブルをイズレルに手渡した。

「帝王の訪問に至福の喜びを覚えたイズレルは、陛下がご退出なされた後、居合わせた観客全員にシャンパンを1杯ずつ与えた」<sup>(16)</sup>。

70年代に入ると、施設の人気は下火になり始めた。1876年にはホールは休業状態で、8月7日にコンサート・ホールで起きた火事で、1時間後にはすべてが灰燼に帰した。イヴァン・イヴァノヴィチ・イズレルは、その翌年に亡くなり、サンクト・ペテルブルグのスモレンスキー墓地に葬られた。

権威ある『ロシア経歴辞典』【“Русском биографическом словаре”】の1897年刊行の巻に、イズレルの項目があり、次のように記されている。

「イズレル、イヴァン・イヴァノヴィチ。スイス出身。ペテルブルグの大衆への娯楽提供者。…30年代の終わりにノーヴァヤ・ジュレーヴニヤ【「新村」の意味】のストロガノフ伯爵所有地に人工鉱泉施設のホールがあった。その舞台では、週2回、夕方に音楽が演奏されていた。1848年にこのホールをイズレルが借り受け、イヴァン・グングリの優れた楽団、ヴァシーリエフのジプシー・コーラス、アラブ人の曲芸一座を専属にし、流行だった活人画を上演、花火やイルミネーションなどを提供した。これらの娯楽は、まさに時流に乗り、当時猛威をふるっていたコレラに気分が鬱ぎ込んでいた首都の住民たちを楽しませた。60年代に入り、園は衰退し始め、イズレルはそれを手放した」<sup>(17)</sup>。

日本使節たちの娯楽施設の訪問は、比較的知られたA.F. ピーセムスキー編集になる雑誌「読書文庫【“Библиотека для чтения”】」の編集部の注意を引かないわけにはいかなかった。該当号の解説担当者が書いている記事を省略なしに以下引用する。

「現在、我々のところには客人が来ている。一人の客人はイギリスのアルフレッド王子で、ペテルブルグとモスクワの名所を遊覧し、モスクワ料理の饗応を受け、すでに祖国に向けて出発した。別の客人たちはまだ滞在しているが、彼らは我々に、そして我々も彼らに、注意の目を向けている。その客人というのは日本使節団一行である。彼らは言うなれば二つの派から成り立っている。すなわち、新しいものの導入とヨーロッパ人との接近に対する公然たる敵対者である古い日本人と、ヨーロッパに学び、ヨーロッパを身近に知ることを望む進歩派の人たちである。後者の人々は、日本に帰国後、ヨーロッパ文明は日本にとり有益なのか否かの問題を最終的に決定するために、すべてを見て回り、すべてを学ぶことが義務づけられている。我々の客人たちの好み奇妙さ、例えば、彼らはシャンパンを大いに気に入って飲んでいるが、わさびやラディシュ【редька】をそのつまみにしている、等々、すでに十分書かれている上、それ以上に、人々の噂に上っている。ペテルブルグは初めての彼らは、首都の様々な名所を案内され、注目にあたいするようなものはすべて目にし、イズレル園での遊興にさえも立ち会った。もちろん、その時のイズレル園の雰囲気は、整然として折り目正しく、主は鷹揚で、見物人も礼儀正しかった。ところで、同所は通常はどんな様子なのかについては、いろいろな人々が種々さまざまなことを言って

いる。我々自身は、イズレル園での遊興のみならず、郊外でのあらゆる遊びにはとうに謝絶していることを改めて認識すべきである。理由は、遊興の場では、警告に務める警察のあらゆる努力にも関わらず、何かスキャンダルが発生すると、安全ではあり得ないからである。郊外の興業場を良く知り度々訪れる人間は、多くの興業場は自分らにとり非常に楽しいと話す。これらの者たちの言によれば、パリのフレンチ・カンカンなんぞは、ペテルブルグのものに比べると、子供のお遊戯であり、陽気な悪ふざけにすぎない。つまり、ペテルブルグの方は、衣装はド派手で悪趣味、破廉恥でふしだら、礼儀正しさの完璧なまでの欠如、無遠慮と不作法、お美しい側はもちろん、お供をする騎士どもともども、双方とも相等しく、これこそが我がペテルブルグの一部の遊興の特徴である。言うまでもなく、最も楽しいお仲間たちは、深夜まで、より正確には、ペテルブルグの朝まで、そこでお散歩するのである。以上、当記事の筆者としては、遊興をよく知る人に語ってもらうこととし、それをもって全体感想を終えることにする<sup>(18)</sup>。

この雑誌の記事担当者にとっての日本使節団員のI.I. イズレル娯楽施設の訪問は、このような印象を与え、遊楽・遊宴のような、この種の娯楽に対する否定的な態度を表明する更なるきっかけとなったのである。

これより以前、この記事の担当者は2月号で次のように書いている。

「…カンカンに集まった大衆は、ここ2年間というものの、カンカンの快感の世界を堪能している。その快感は北のパルミラと呼ばれる都ペテルブルグの大衆生活を満たしているのだ。カンカンはいたるところに浸透している。今や群衆を引きつけることができるのはカンカンのみである…。…しかしながら、その代わりに、強い酒をあおることで〔仮装舞踏会の参加者は、クリモフ注〕大成功を収めるのである…。最も素朴で活気ある仮装舞踏会はシュステルクラブで行われるものだが、スキャンダルはかならず起き、この場合の罰金は3ルーブルである。ビールはすべて撲滅してやると言わんばかりに大量に消費される。…上流社会の若者はたくさんのスキャンダルを引き起こすためにそこに行く…。…冬のシーズンの間だけで、毎日、エカチェリンゴーフ、イズレル園、ペトロフスキーホール、アレクサンドル庭園の舞踏会では、熱狂的な踊りが展開される…。カンカンの成功ぶりは目を見張るものがある…。踊り子はバレエのような軽やかさで恐るべきステップを踏む。曲芸とカンカンが空想させるものの極限は、皆を驚愕させる。踊り子たちは放埒に身を任せる。そのさまは、パリの巡査【парижский sergent de ville】ならば、きっと、この愛すべき悪戯娘をどこぞへ連行していくにちがいないと思わせるほどだ。…そしてこれらすべての乱癡気騒ぎは、すさまじい勢いで進み、マースレニツァでその理想の極みに到達する<sup>iii</sup>。女を乗せたトロイカは飛ぶように疾走し、すべての郊外のホールやレストランは満員になる。…イヴァン・イヴァノヴィチ〔・イズレル〕は、すべての娯楽込みのピクニックを3ルーブルで提供している…。」<sup>(19)</sup>

この世相戯評の筆者の否定的な激高とは裏腹に、首都の大衆の楽しみと愛着が明確に浮き彫りになり、内務省発行の政府系新聞で「ビュッフエを訪れることが主たる目的である夏の郊外娯楽のような大混雑の中で、誰もが分かるような極めて困難な任務を遂行するに際しての、警察の並々ならぬ配慮と範とすべき丁寧さ」が特筆されたこともよく分かる。

保田孝一は、自己の論文の中で、新聞「北方郵便」第175号と雑誌「祖国雑記」第143号に書かれた記事に載る、慶應義塾大学の創始者で明治時代の教育者である福澤諭吉に光を当てた恐らく、最初の日本人歴史研究者であろう。ロシアにある多数の文書館や数々の図書館を利用した、日本

このこの権威のある研究者は、福澤諭吉のペテルブルグ滞在に触れたこの刊行物に最初に注意を向けた<sup>(20)</sup>。

鈴木健夫は、極めて興味深い著作『ヨーロッパ人の見た文久使節団』の著者の一人であるが、イズレル園への日本使節団訪問について、保田孝一を引く形で短く記している。二人の研究者は使節団とこれに対するロシア側の反応にのみ注目している。両人は、サンクト・ペテルブルグの歴史との関連で、この遊興施設の創立の歴史を見ていないし、イヴァン・イヴァノヴィチ・イズレルの履歴に興味を示していない<sup>(21)</sup>。だが、これが判らなければ、使節の受け入れ側であるロシアが、日本使節団接待のための訪問日程の中に、なぜ、この施設を組み入れたのかに対する答えはでない。使節を受け入れた側は、使節の応接プログラムに関与しているからである。ロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルグと全ロシアの歴史に多大な足跡を残したのであるから、I.I. イズレルは、偶然選ばれたわけではない。

ノーヴァヤ・ジェレエヴニヤ【新村】のI.I. イズレル施設の人気と広く知られていることは、フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーが、その小説『罪と罰』の中で彼の名を言及している事実でも判る。【主人公】ロジオン・ラスコーリニコフが、新聞を眺め廻し、高利貸の老婆殺害の記事を捜そうとした場面で、イズレルという、興行主の名前に何度も出会う。

「イズレル…、イズレル…、アツチャーキ…、イズレル…、バルトラ…、マッシモ…、アツチャーキ…、イズレル……、ふう～、畜生！あッ、おっと、雑報だ。女が階段から落ちた…、商人が酔って焼け死んだ…、ペスキイで火事…、ペテルブルグ区で火事…、【もうひとつペテルブルグ区で火事】…、またまたペテルブルグ区で火事だ。イズレル…、イズレル…、イズレル…、マッシモ……、ああ、これだ……」<sup>(22)</sup>。

ついに、ラスコーリニコフは必要な記事を見つけた。自分がした殺人について書いてある記事である。今日、この小説を読むロシア人の内、誰が、このイズレルという言葉に隠された意味を説明できようか。皆がこれは首都の大衆を喜ばせた人間の姓であると判るわけではない。19世紀の40-50年代には、彼の名は噂では皆知っていた。彼の施設には、ロシア帝国の有名な人々が皆訪れたと言うことができる。今日では、現代ロシア人の読者は、注釈なしには、誰のことか、あるいは、何のことか、判らない。ところで、それゆえに、この部分を日本語に翻訳するに際しても、詳細な注釈のないまま放置されている<sup>(23)</sup>。ほぼ確言してよいと思うが、日本人の読者には、このくぐり、は、「イズレル」という意味のない言葉の羅列であるとしか感じられないはずである。『罪と罰』を日本に紹介した翻訳者自身も「イズレル」という言葉の背後にある人物と事柄について、知らなかったのであろう。

日本人たちはまた、イズレル園を訪問した際の印象を日記に書き留めている。彼らが書き留めたこととロシアの定期刊行物の中の記事とを比べてみると興味深いものがある。野澤郁太は、残念なことに、その道中日記の中で娯楽施設の訪問に関して書き残していない。おそらく彼は催し物には行かなかったものと思われる。このことは明白で、イズレル園に行かなかったからこそ野澤はそれに関して何も書くことができなかったのである<sup>(24)</sup>。

それでは、まず、日本の研究で最もよく引用される市川清流の日記に当たることにする。文久2年7月26日付の書き留めの中に、かなり長い一文があるのが我々の目を引く。

「晴。今日、午後6時<sup>(25)</sup>、使節三人は花火【日記の記述は「花機砲」】の見物をするため旅館を出た<sup>(26)</sup>。川岸沿いを東に向かっておよそ4-5町 [439.6-549.5m、クリモフ注] 過ぎたところ

で<sup>(27)</sup>、長さがおよそ150間の舟橋【понтонный мост】のに近づき<sup>(28)</sup>、その橋を渡り北に向かった。そしておよそ20町 [2,198m、クリモフ注] 過ぎたところで、行き先に長さおよそ80間 [144.8m、クリモフ注] の橋がまたあった。橋を渡り川を越えて6町 [659.4m、クリモフ注] ばかり過ぎたところでまた橋があった。長さはおよそ120-130間 [217.2-235.3m、クリモフ注] であった。再びおよそ6町 [659.4m、クリモフ注] 進み、幅およそ15間 [27.15m、クリモフ注] 長さ50間 [90.5m、クリモフ注] の大きな公邸【原語は】官舎に我々が入った。その敷地内には見物のための様々な娯楽施設があった。そのひとつの場所には、幅およそ7間 [12.67メートル、クリモフ注] 長さ30間 [54.3m、クリモフ注] の舞台があった。最初に、全員が美しい衣装を着た少年10人と少女12人が舞台に出てきた。少女のひとりが前に出て [日本の四弦の、クリモフ注] 琵琶に似た楽器を演奏しながら歌い出し、それに合わせて少年のうちのひとりが舞台に進み出て、数曲踊りを披露した。それから少女7人が歌を歌った。続いて、少年ひとりと少女6人が踊りを披露した。その後で年長の少年【подростоак ただし日記には年長を表す言葉なし。日記の記述は「少年】と少女ひとりが舞台に出てきた。年長の少年は両手に4本の竹を持って拍子をととり、[少女が]踊った。これで踊りは終了した。[建物の] 裏側から庭園に出たところ、そこには敷地一杯に、漢字の「田」と「囿」に似た形の長い線が引かれており<sup>(29)</sup>、その線上に何百という燭台の灯【記述は「挑燈】が燃えていた。その他に庭園には3箇所舞台の形をした温室【同「花屋】があった。温室の庇の下には端に同じく何百という灯りが燃えていた。更に、真正面の真ん中と左右に高さ約5間 [9.05m、クリモフ注] の建物【同「階】が3つあった。建物 [に巡らせてある] 欄干にはそれぞれ大きな花瓶が5つ置かれており、建物の各階には【на их ярусе 同「各級】燭台が灯されていた。3人の使節が前に進み出たところ、上の階から【同「最上の級より】いきなり水流が幾つか噴水のように噴き出し、あふれた水は燭台の上流れ落ちた。のみならず、花瓶からも幾つかの水流が噴水のように吹き出して水しぶきが四方に飛散し、人々の服を濡らした。まさにその時、突然建物【同「階】の裏側から花火の断続的な音が鳴り響いた。花火は流星にそっくりだった。それと同時に、柱の間と屋根の斜面の端あたりで、花火の打ち上げ装置【同「花炮】からいっせいに発射された。花火の色は、緑、淡青、黄、深紅、紫【同「青碧黄紅紫】である。花火の爆発音が響き渡ると同時に、丸い火【круглые огни 同「火先】が人々がひしめいている場所に降り注いだ。その火はまさに流星あるいは彗星を思わせるものであった。火の或るものは落花のように水面を移動し、或るものは火花のようになり、突然の風の中で揺れ動いていた。それらのきらめきあたりはまるで陽が照っている日中のように明るくなった【同「落花水面に漂々飛絮空中に舞ふ爛燦たる明光白晝に異ならず】。その瞬間、集まった観客の群衆から拍手がわき起こり、大きなどよめきとなった。そして一瞬の静寂がおとずれた。しばらくすると、どこかでは【в каком-то месте日記の記述は、「一所】、およそ40人からなる音楽隊が数曲を演奏した。音楽が鳴りやんだ。我々が円形舞台—およその大きさは高さ3尺 [90.9cm、クリモフ注]<sup>(30)</sup>、直径が4尺5寸 [136.27cm、クリモフ注] に近寄った時<sup>(31)</sup>、舞台に4頭の小馬【同「小駒1匹」、以下同様に、1匹の模様】が登場した。調教師が長い枝の鞭で小馬たちを操った。小馬たちは、舞台をゆっくりと廻り、前足で立ち上がったたり、後ろ足で立ち上がったたりした。次に、調教師【同「馬夫】がハンカチをこっそりと取り出してそれを隠すと、小馬はすぐさまそれを見つけ口にくわえて主人に渡した。調教師はもう一度ハンカチを今度は別の場所に隠したが、小馬は前と同じように口にくわえて主人に渡した。次に調教師はハンカチを馬の後ろ足に結びつけ



たが、馬はそれを口でほどいて同じように主人に渡したのであった。次に、小猿が鞍に坐ると小馬は後ろ足で立ち上がり歩き出した。そして小馬が舞台を回りだすと、小猿は鞍の上で足で垂直に立った。その間舞台の2箇所幅がおよそ2尺〔60.6cm、クリモフ注〕高さが4尺〔121.2cm、クリモフ注〕の布が張られ、小馬たちがぐるっと回ってその場所の中に入りだすと、小猿は布を跳び越えて、鞍の上に立った。次に、直径がおよそ2尺〔60.6cm、クリモフ注〕の円の中に紙が敷かれて2箇所が持ち上げられ、小馬がそこに入ると小猿は紙を突き破って馬の鞍の上に立った。小猿は小馬に乗ったままこれらの軽業をまるで〔プロの〕軽業師のようにやっけてのけるのであった。

次に舞台の中央で、地上5尺〔151.5cm、クリモフ注〕くらいの高さの蓋のようなものにハンカチが取り付けられた。すると舞台に子犬たちが走り出て、跳び上がったかと思うと、ぶら下がったハンカチに齧り付いた。それと同時に、蓋の縁にぐるりと取り付けられた花火の炸薬が火を噴き始め、蓋はまるで水車のように回った。導火部分の炸裂と花火の火が四方八方に飛び散った。その状況の中で子犬たちはぶら下がった状態で、ハンカチに齧り付いたまま離すことがまったくできないのであった。動物の出る演目はこれで終了した。その後、我々は建物の中に入り、食事をとった。食事を済ませて舞台の方に戻ると、少年5人と少女3人が琵琶〔弦楽器〕の伴奏で幾つかの曲を歌った。それが終わると今度は7人の少女が歌った。出し物が終了した後、深夜2時<sup>(32)</sup>、旅館に帰った<sup>(33)</sup>。

以上、一切省略せず市川が日記に記した部分をロシア語に訳したものを挙げた。彼が日記に記したことから幾つかの結論づけと想定をすることができる。まず、日記の著者は、自分たちが訪れたのが「イズレル園」という名の私的な娯楽施設であることを理解していなかった。市川は、日本使節団は政府関係の公邸を訪問したものと思っていた。おそらくロシア側の関係者は、客たちがこれからいかなる場所を訪れるのかを説明しなかったのであろう。上記引用した部分を読んだ限りでは、そこに書かれているのは訪問から受けた個人的な印象というよりは、むしろ上層部への報告書であり、市内の道案内（娯楽施設への行き方）と演目内容を詳細に述べたものとなっている。これについては、ロシア帝国に住む人々の文化を紹介する試みをしなかったというロシアの外交担当者の落ち度に帰することもできよう。前もっての説明がなくとも、日本人はジプシーの合唱団とロシアの民族合唱団を区別することができるであろう、との想定はまずできるはずでなかったはずである。新聞「北方郵便」【“Северная почта”】と対照的に、市川は、I. I. イズレルの指示により、音楽隊が日本使節団を出口まで送ったことについては触れてさえいない。おそらく彼は、この配慮の印を外国高官を見送る際の通常の儀礼ととったのであろう。

それ以外に、日本使節団は河川ヨット・クラブの漕艇競技会大会を訪れた。その時の様子について以下数言述べる。

サンクト・ペテルブルグ帝室河川ヨット・クラブ【Санкт-Петербургский Императорский речной яхт-клуб】が創設されたのは1860年、日本使節団がサンクト・ペテルブルグにやって来た1862年の少し前のことである。1718年にピョートル一世によって設立された「ネフスキー艦隊【Невский флот】」が河川ヨット・クラブの祖ともいえるべきものであるが、残念ながらその艦隊はその後、存続しなかった。新たに、皇帝ニコライ一世の指持とコンスタン・ニコラエヴィチ大公の庇護の下に創設された組織は、改革皇帝ピョートル一世によって始められた事業を受け継ぐ

もので、イギリスのヨット・クラブの経験を取り入れた。クラブの規約には「皇帝陛下ならびに皇太子殿下庇護の帝室サンクト・ペテルブルグ・ヨット・クラブ。名誉会長はコンスタン・ニコラエヴィチ大公殿下」と明記された<sup>(34)</sup>。

1860年3月14日、クラブの開設式典が厳粛に行われ、海軍省長官【управляющий морским министерством】N.K.クラッベ、海軍省官房長官【управляющий канцелярией морского министерством】S.A.グレイグが列席した。同日、組織の規約が海軍省官房により認められ、クラブの正式名称が「サンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブ」となった。クラブの主要な任務は、漕艇競技と帆走競技の広報と発展であった。M.M.ピリャエフの認可を得て、1860年5月21日、サンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブは、それまでの3年間、スターラヤ・ジェレーヴニヤ【「旧村」の意】にあった自分たちの旗を初めてノーヴァヤ・ジェレーヴニヤ【「新村」の意】に掲げた。1863年、ヨット・クラブはクレストフスキー島に本拠を置くこととなった<sup>(35)</sup>。

第1回の漕艇競技大会は認定された規則に従い、1860年7月31日、エラーギン埠頭正面のスレードニャヤ・ネフカ川で行われた<sup>(36)</sup>。

「ヨット・クラブの第1回大会は、コンスタン・ニコラエヴィチ大公のご臨席を賜った。大公はクラブの庇護者の旗を掲げた蒸気船ストレリナ号に乗ってアレクサンドラ・イオシフォヴナ大公妃と共にやって来た」<sup>(37)</sup>。この漕艇競技大会は民衆祭日の性格を持つようになり、このスポーツ種目の良い広報となった。毎年、優勝者には、大会組織者からの賞として、あらかじめ建造された小さな船が贈られた。やがて漕艇競技に代わり帆走競技が主流となり、1900年までにサンクト・ペテルブルグ・ヨット・クラブは、徐々に競技愛好者を統合する団体が変わっていった。この変化は組織名称にも反映され、「1910年3月8日、サンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブに対して皇帝陛下より『帝室河川ヨット・クラブ【Императорский Речной Яхт-Клуб】』という名称が下賜された」<sup>(38)</sup>。

残念なことだが、1894年にクラブで発生した火事のため、それより前の35年間分の文書類が収められていた文書館が焼失した。

1862年8月6日に行われたレースには、首都在住のイギリス人たちが参加、また、漕艇協会「ストレーラ」のメンバーが、アウトリガー付「ダルト号」で4本オール小艇の部に出場した。この日は、強い西風で、マールヤ・ネフカ川の波は高かった。ペテルブルグの変わりやすい気象にまだ慣れていないイギリス人たちは、小艇【гичка = captain's gig = Капитанская гичка、通常櫂は6-10本、帆があることもないこともある】「アレクサンドラ号」に乗り組んだオフトラ地区からの愛好者たちにゴールで1分1秒差で負けた。大会を実際に目にした人たちは次のように書き記している。

「この日は、特にレースの始まる頃には、風と波が非常に強くなり、舵手がD.マルシャロフで漕ぎ手が水兵たちの「クロンシュタトカ号」と舵手がB.タイヴァで漕ぎ手が渡し守【первозик = перевозчик】たちの「ミスータ号」は、完全に波に吞まれ転覆した。もっとも乗り手は無事救助された。それ以来イギリス人たちは、なぜか、長期間団体競技には出場せず、ようやく1870年になって両チームは漕艇協会「ストレーラ」主催の大会で対戦し、今回はイギリス人たちが勝利した」<sup>(39)</sup>。

1862年には引き続き「主たる種目は海軍省賞の4人乗り種目で、マルシャロフ、ローゼン男爵、A.シチェニコフ、プレヴォが乗り組んだ最優秀チームが賞として8本オールの小艇『モリヤナ(北

風)号【“Моряна”】を再度手にした」<sup>(40)</sup>。

以上に関連して、サンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブの会員の中にロシア史および日露関係史に深い足跡を残した人が少なからずいたということを指摘しておかなければならない。例えば、ヨット・クラブの名誉会員のひとりには、一等侍従武官K.N. ポシェットがいた<sup>(41)</sup>。

「昨日、『河川ヨット・クラブ』の漕艇競技大会を見学することができた。その仔細については次回に伝えることとし、今回は、我がネヴァ川の海軍軍人たちの祭典のみについて数言を費やすことにしたい。12時開始の予定であった競技大会は、午後2時に繰り下げられた。開始時間までにマーラヤ・ネフカ川兩岸およびエラーギン橋のもとには何千人もの好奇心にあふれた人々が集まり、兩岸は文字通り人間で埋め尽くされていた。そのうちの多くの人には、競技大会に招待された日本使節団員をひと目見たいという好奇心も加わっていた。招待券を持った観客のために設けられたテントの上には、白地の真ん中に赤い円の入った日本国旗が翻っていた。エラーギン橋の近くには、蒸気船ペテルブルグ号とイリメニ号および数隻の小型ヨットが停泊し、川の上にはヨット・クラブのボートや好奇心いっばいの観客を乗せた渡し小船【ялботы перевозчиков】が何艘か行き来していた。2時、日本使節団員を乗せた四輪箱馬車が到着した。密集した群衆たちは動き出し、音楽の演奏が始まり、日本使節たちは、好奇心に満ちた人々が両側に並ぶ中、彼らのために用意された場所に向かった。先頭に立ったのは下野守【князь Симодский「シモツキー公」】、その後には何人かの使節が続いた。彼らは全員黒い衣装に身を包んでいた」<sup>(42)</sup>。

次号の「クロンシュタット報知」【“Кронштадтские ведомости”】(64号、8月10日)に、漕艇競技大会の様子とそこに臨席した日本使節団に関する追加の情報が掲載された。「第二エラーギン橋の近くには、イリメニ号とペテルブルグ号が、その後にはクラブ会員の所有する素晴らしいスクーター船とヨットが停泊していた。競技は、橋やヨットのいる場所の下手に設けられた浮標のところからスタートし、スレードニャヤ・ネフカ川の河口に置かれた折り返し目印の浮標【поворотный бакен】がゴールであった。本部席には賓客の中に日本使節団もいた。海外の遠い東方からやって来た客人がそこにいるということが祭典に一層の華やかさと彩りを添えた。第1レースは不成立に終わり、参加3チームに与えられる予定の銀杯は誰の手にも渡らなかった。ミスータ号は水浸し、川底に沈んだ。クロンシュタトカ号も…ミスータ号と同じ運命を辿った。オストルハ号は、ほとんど沈没状態になった競争相手の遭難を見て、折り返し地点まで行かず本部席の前に戻ってきた。沈没した小艇の漕ぎ手と舵取りは救出された。彼らは水風呂に入り、それで冒険は終わった」<sup>(43)</sup>。

賓客すなわち日本使節団には、漕艇競技の進行がもっともよく観察できる審判席の傍の特別な場所が割り当てられた。一方他の観客たちは、スレードニャヤ・ネフカ川の兩岸、特にクレストフキー島とエラーギン島の間に掛かっている第二エラーギン橋の向こう側に陣取っていた。

市川清流は(文久2年)7月23日に次のような書き留めている。

「晴れ。76度。今日は午前10時から3人の使節がすべての[条約を結んでいる]国の領事館邸を訪問した。随員は伴わなかった。その後で使節らは、午後2時から競艇[市川は「競渡(きょうど)』と記す]を観覧するために旅館を出発した。私は同行の者には選ばれなかった。そのため、以下に書き記すのは、使節に同行した者から聞いたことである。川岸には幅1.5間[2,715m、クリモフ注]、長さ30間[54.3m、クリモフ注]の正面席が設けられ、その前には様々な色の旗が

はためいていた。両脇と後で音楽が演奏されていた。2艘の「小艇【пятерки】」にそれぞれ4人あるいは8人ずつ坐り、対岸を目指して大きな船のところから出発した【市川の日記の記述は「小船ニ四人或ハ四人乗リタルニ雙宛五組前岸ニ向テ舸ヲ飛シ】。あるいは、カヌーに坐り、前部と後部で舵を操作しながら競争をした。あるいは、ボートにひとりで乗り、塔を起点に端から端まで駆け抜けるのであった。兩岸の観客たちは群れを成した野生の猪に似ていた【日記の記述は「兩岸ノ観客群ヲナス堵ノ如クナリシト云」とあり「猪」ではない】<sup>(44)</sup>。

高島祐啓（1832-1881）は、漕艇競技大会の様子を次のように記している。

毎年西暦8月のどこかの日曜日には、ペテルブルグで、ネヴァ川の支流の一つでネフカと呼ばれる川の橋のひとつの傍で漕艇競技大会が行われる。この競技大会を組織しているのはヨット・クラブ〔「ヤブト仲間」〕である。競争の距離を高島は、おそらく目測によって、「半里」<sup>(45)</sup> [1.927 km、クリモフ注]としている。実際には距離は2.5ヴェルスタ、現在の単位でいえば2,671kmであった [1 ヴェルスタ = 1066.8km]。さらに高島は、距離により、赤、白、緑、黄の4つの色の旗が立てられていると記している。それらの旗の下で1艘ずつが出発位置に並び、決められた合図で4艘が同時に川下に向かってスタートして競争が始まる。競争に参加するボートは大きさも、漕ぎ手の人数も1人から4人までの範囲で様々である。勝者は、旗が目印のラインを最初に横切った者とされている。勝者は拍手喝采と祝砲で迎えられ、賞が授与される。最も優れた勝者には皇帝から2本マストの漁船が贈られた。他の勝者も必ず賞が与えられる。高島は、距離により、万が一、誰かが災難に遭ったような場合は直ちに救助できるよう、救命ボートが待機していた、と記している。これを書き留めた筆者は、ロシアにおける漕艇競技はイギリスにおける競馬に比すことができるとしている<sup>(46)</sup>。

競技大会は、「1861年1月27日にサンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブ委員会技術部により承認された漕艇競技規定」に従い行われた<sup>(47)</sup>。同規定第5項「海上指揮権【морское начальство】」によると、「競技者に賞を授与するため」委員会の要請により審判が任命される<sup>(48)</sup>。競技大会は、クラブ会員から集められた会費、「競技大会の成功に寄与することを望む」機関および個人からの寄付により行われる（第7項 競技費用）。競技は漕ぎ手の人数に従い部門ごとに分かれ、各部門に賞が制定された。もし何れかの部門の競技登録者が3チームあるいは3名に満たないような場合は「その部門の競技は不成立となり、また賞は授与されない」（第9項）<sup>(49)</sup>。部門の数は、規定第11項によれば、「年毎に委員会により決定される。その一つは海軍省【морское ведомство】から賞の対象となる。この場合、当該部門に参加する艇はクラブ会員の所有するものでなければならない。同様に、これらの艇に乗り組む舵手と漕ぎ手も協会員でなければならない」<sup>(52)</sup>。

この規定に従い、ヨット・クラブ委員会は、日本使節団が観覧した1862年競技大会に対し、事前に、雑誌「海軍雑誌」【“Морской сборник”】1862年8月号に、漕艇競技大会を行うとの公示を掲載した。

「海軍雑誌

海軍学識委員会監修【под наблюдением морского учёного комитета】

フセヴォロド・メリニツキー編集

第16号

〈52〉 1862年日本使節団がみたサンクト・ペテルブルグのイズレル興行施設と漕艇競技会大会（クリモフ）

№ 8

1862年 8月

サンクトペテルブルグ

海軍省印刷局

漕艇競技大会の件

附録 1-2 頁

サンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブ委員会は、皇帝のご裁可を受けた協会規約に則り、1862年 8月 6日 月曜日正午12時、スレドニャヤ・ネフカ川において、クレストフスキー島とエラーギン島をつなぐ第二エラーギン橋の傍にて、以下のプログラムで漕艇競技大会を挙げる。

- 第 1 部 海軍省【морское ведомство】賞部門。クラブ会員からなる漕ぎ手 4 名と舵手 1 名、ヨット・クラブ会員所有の小艇。
- 第 2 部 ヨット・クラブ賞部門。愛好者、漕ぎ手 4 名と舵手 1 名、アウトリガー付小艇。この部門はアウトリガーなしの小艇の参加も可。
- 第 3 部 ヨット・クラブ賞部門。愛好者、漕ぎ手 2 名と舵手 1 名。
- 第 4 部 ヨット・クラブ賞部門。愛好者、漕ぎ手 1 名（舵手なし）。
- 第 5 部 ヨット・クラブ賞部門。愛好者、ダブル・アウトリガー付【на лыжах】、漕ぎ手 1 名。
- 第 6 部 ヨット・クラブ賞部門。水兵、あるいは渡守からなる漕ぎ手 4 名、舵手付き。

競技は、1861年 8月 27日 委員会技術部認可の規定に従って行われる予定<sup>(+)</sup><sup>(51)</sup>。

競技大会に参加する小艇の登録は、上記規定第15項、第16項、第17項に則い、厳封封筒に入れて、7月 27日 午後12時までクラブ事務所（スターラヤ・ジェレーヴニヤのヴォルコフの別荘）で受け付ける。

ヨット・クラブ委員会は、第 3 回競技大会を行うにあたり、今年も漕艇愛好者が競技に積極的に参加し、そのことにより総合的成功に寄与することを期待する」

高島はその日記の中で、漕ぎ手は決まったユニフォームを着用し、各ボートの旗の色も決まっていた、と記し、ボートの出発点、ボートの長さ、走行距離についても具体的に記している。それらはすべて規定に定められたもので、例えば規定の第18項では、乗り組み手およびボートに対して検査を行い、その後、乗り組み手は検査を受けた服装のままに競技に臨まなければならないと指示されている。第18項では、競走範囲が定められており、「浮標」が目印となる。「艇は、正面席より上流に設けられた自己の目印のところから流れに沿って下り、折り返しの目印の浮標【поворотная вежа】のところまで行き、それを右側から迂回し、本部席の真向かいの設けられている競技のゴールの目印である旗竿に向け戻る」。

高島は各漕艇の色とりどりの旗に付き、記述している。クラブの規定を見ると、次のような、いっそう詳細な説明がなされていることが判る。

「第20項 漕艇の配置と小旗の受け取り。競技大会の前日、午後10時、全登録者の到着を待た

ずに、委員会は、くじで、競技での各艇の位置を決める。各艇は出発前には所定の浮標のところにいなければならない。くじの際、小旗を配布するので、競技中は必ず、舳先の旗竿に掲げること。小旗には、プログラムに記されていると同じ各艇の番号が記してある。旗印の色は出発点となる浮標の色にも呼応している」<sup>(52)</sup>。

興味深いのは、艇のスタートの手順を規定した条項である。

「第23項 小艇のスタート。スタート数分前に大砲が発射され、それが用意の合図となる。スタートは、白い旗を掲げた笛の音に従って開始される。」「第24項 スタートの合図を待つ間、各艇は所定の浮標のところで待機し、最初の合図が鳴った後、オールの握り部分が、足台から突き出ないように、竜骨に対して直角の方向で、水平にオールを保持すること」<sup>(53)</sup>。規定第34項では賞の授与について記されている。「第34項 賞の授与。賞は、異議判定が付かない限りは、ゴールラインを最初に通過した艇に授与される。異議判定が付いた場合は、全部門の競技が終了した後で審判が委員会メンバーに意見を求める」<sup>(54)</sup>。また、最後の第40項に「悪天候あるいは強風の場合競技は翌日に延期される」との但し書きがある<sup>(55)</sup>。

ヨット・クラブの50年にわたる歴史（1860-1910）の中で、500回の競技大会が行われ、クラブから6万ルーブルの額の賞が出された。

「それ以外に、海軍省ならびに商工省から7万5,000ルーブル、皇族から9,000ルーブルにおよぶ金額が寄せられ、クラブが存続した50年間に授与された賞の総額は85万ルーブル近くに達した。

…この数字資料に付け加えなければならないのは次のことである。すなわち、河川ヨット・クラブは、その後、数々の名誉ある賞やメダルを授与されたサンクト・ペテルブルグにおける最初のヨット造船所であり、フィンランド湾全域で最初の航海学校【Мореходный Класс】の創立者でもあった。この航海学校は今日においてもロシアの商船員養成において主導的な地位を占めている。また、このヨット・クラブは、長期に渡り、ロシアにおける唯一の帆走スポーツの育成施設であり、その後、ロシアの他のすべてのヨット・クラブにとっての模範となった。そのことから明らかなように、ロシアにおける航海スポーツの発展においてサンクト・ペテルブルグ河川ヨット・クラブの半世紀にわたる活動は名誉ある地位を占めている」<sup>(56)</sup>。

日本使節団は1ヶ月以上にわたりペテルブルグに滞在したが、その間に使節団たちは、ロシアの首都の人気のある多くの名所を訪れ、町の日常生活に触れることができた。日本人たちは、首都の住民たちのよりどころをよりよく理解する機会を得た。緊張感に満ちた外交交渉だけではなく、遊興施設、スポーツ競技大会も彼らの訪問日程に組まれていた。使節団はペテルブルグの人たちの人気を得、団員たちが様々な行事の場に行くこと自体が、彼らの通商的成功を確実なものとした。本稿で私は、交渉の過程および結果に全注意を向ける（このことが大きな意味を持つことは言うまでもない）という紋切り型から離れると同時に、固定観念の枠から出て、ロシアと日本人の人々同士の異文化交流を研究対象とすることを試みた。その種の交流が相互理解を強め、複雑な外交課題の良き解決に向けての基盤を生み出すからである。

## ●使用文献

1. Библиотека для чтения. Журнал словесности, наук и политики, издаваемый под редакцию А.Ф. Писемского. Двадцать-девятый год. Том сто-шестьдесят-девятый. Февраль. Санктпетербург. В типографии штаба отдельного корпуса внутренней стражи. 1862. Фельетон. Пестрые заметки. С. 131-156.

〈54〉 1862年日本使節団がみたサンクト・ペテルブルグのイズレル興行施設と漕艇競技会大会（クリモフ）

2. Библиотека для чтения. Журнал словесности, наук и политики, издаваемый под редакцию А.Ф. Писемского. Двадцать-девятый год. Июль. Том сто-семьдесят-второй. Санктпетербург. В типографии отдельного корпуса внутренней стражи. 1862. Внутреннее обозрение. 160 с.
3. Даль Владимир. Толковый словарь живого великорусского языка: В 4 т. Т. 1: А-З. М.: Терра, 1994. 800 с.
4. Долбнин В.Г. Развитие яхт-клубовского движения в Санкт-Петербурге//Известия Российского государственного педагогического университета им. А.И. Герцена. № 124. С.-Петербург, 2010. С. 30-37.
5. Достоевский Ф.М. Преступление и наказание//Собрание сочинений в 7 т. Т. 2. М.: LEXICA, 1994. 504 с.
6. Императорский Речной Яхт-Клуб 1860-1910. Очерк деятельности С.-Петербургского Речного Яхт-Клуба за 50 лет 1860-1910. Т. 1. С.-Петербург: Тип. М.Д. Ломковского, Думская улица, д. № 5. 1910. 390 с.
7. Климов В.Ю. Дневник Такасима Ю:кэй “Путевые заметки по европейским странам”// Orientalia et Classica. Труды Института восточных культур и античности. Выпуск LII. История и культура традиционной Японии 7. Отв. редактор А.Н. Мещеряков. М.:Наталис, 2014. С. 286-306.
8. Кронштадтские ведомости. № 63. Среда, 8 августа, 1862 г.
9. Кронштадтские ведомости. № 64. Пятница, 10 августа, 1862 г.
10. Отечественные записки, журнал учено-литературный и политический, издаваемый А. Краевским и С. Дудышкиным. ТОМ CXLIII.- Отд. III. 1862. год двадцать-четвертый. Август. Санктпетербург: в типографии Н.Н. Глазунова и комп. 1862.
11. Правила для гонок гребных судов Речного Яхт-Клуба// Морской сборник, издаваемый под наблюдением морского ученого комитета. Том LII. № 3. Март. Санктпетербург: В типографии Морского Министерства, 1861. [Раздел] Смесь. С. 18-22.
12. Пыляев М.И. Забытое прошлое окрестностей Петербурга. С 104 гравюрами. С.-Петербург: Издание А.С. Суворина, 1889. 550 с.
13. Русский биографический словарь. Том II. Алексинский-Бестужев-Рюмин. Издан под наблюдением председателя Императорского Русского Исторического Общества А.А. Половцова. С.-Петербург: Типография Главного Управления Уделов, 1900. 800 с.
14. Русский биографический словарь. Ибакъ-Ключаревъ. Издан под наблюдением председателя Императорского Русского Исторического Общества А.А. Половцова. С.-Петербург: Типография Главного Управления Уделов, 1897. 756 с.
15. С.-Петербург. От другого корреспондента. 24 августа// Морской сборник, издаваемый под наблюдением морского ученого комитета. Редактор Всеволод Мельницкий. Том LXVIII. № 9. Сентябрь, 1863. Санктпетербург: В типографии морского министерства, 1863. [Раздел] Современное обозрение. С. 48-52.
16. Санкт-Петербургские ведомости. № 181. Вторник, 21 августа, 1862 г.
17. Северная почта. № 72. Суббота, 31-го марта, 1862 г.
18. Северная почта. № 74. Вторник, 3-го апреля, 1862 г.
19. Северная почта, № 76. Четверг, 5-го апреля, 1862 г.
20. Северная почта. № 122. Четверг, 7-го июня. 1862 г.
21. Северная почта. № 175. Суббота, 11-го августа, 1862 г.
22. Новый устав Императорского Санктпетербургского Яхт-Клуба. Санктпетербург: В типографии Второго Отделения Собственной Его Императорского Величества Канцелярии, 1858. 74 с.
23. ドストエフスキー「罪と罰」米川正夫訳「世界文学全集」第10巻、河出書房新社、1965年586頁。
24. 市川清流「尾蠅欧行漫録」『遣外使節日記纂輯』第2巻所収1929年249-562頁。
25. 野澤郁太「遣欧使節航海日録」『遣外使節日記纂輯』第2巻所収 1929年113-248頁。
26. 鈴木健夫、P. スノードン、G. ツォーベル『ヨーロッパ人の見た文久使節団』早稲田大学出版部 2005年190頁。
27. 保田孝一「ペテルブルグの福沢諭吉」『福沢諭吉年鑑』第17巻 1990年 47-72頁。

注

- (1) Северная почта, № 76. Четверг, 5-го апреля, 1862 г. С. 302. (【 】は訳者の注、以下同様。)
- (2) Северная почта. № 72. Суббота, 31-го марта, 1862 г. С. 287.
- (3) Северная почта. № 74. Вторник, 3-го апреля, 1862 г. С. 294.
- (4) Там же.
- (5) Там же.
- (6) Там же.
- (7) Северная почта. № 122. Четверг, 7-го июня. 1862 г. С. 487.
- (8) 1861年から1866年のでСанクト・ペテルブルグ総督の地位にあったのは、アレクサンドル・アルカーチエヴィチ・スヴォーロフ (1804-1882)、かの有名なロシアの将軍、総司令官のアレクサンドル・ヴァシーリエヴィチ・スヴォーロフ (1730-1800) の孫。1859年9月アレクサンドル・アルカーチエヴィチ・スヴォーロフは歩兵大将に昇進、1861年4月23日国会議員【член Государственного совета】、同年11月4日Санクト・ペテルブルグ軍務総督。
- (9) 当時警察署長であったのは、イヴァン・ヴァシーリエヴィチ・アンネコフ中将 (1814-1887) であった。1860年1月アンネコフは憲兵隊第一管区の長官であった。1861年中将に任じ、1862年3月Санクト・ペテルブルグ警察署長【должность С.-Петербургского полицмейстера】、5年後Санクト・ペテルブルグ守備司令官【должность Санкт-Петербургского коменданта】(Русский биографический словарь. Том II. Алексинский - Бестужев-Рюмин. Издан под наблюдением председателя Императорского Русского Исторического Общества А.А. Половцова. С.- Петербург: Типография Главного Управления Уделов, 1900. С. 197)
- (10) Северная почта. № 175. Суббота, 11-го августа, 1862 г. С. 700.
- (11) Санкт-Петербургские ведомости. № 181. Вторник, 21 августа, 1862 г. С. 781.
- (12) Отечественные записки, журнал учено-литературный и политический, издаваемый А. Краевским и С. Дудышкиным. ТОМ СХLIII. - Отд. III. 1862. год двадцать-четвертый. Август. Санктпетербург: в типографии Н.Н. Глазунова и комп. С. 362.
- (13) Там же. С. 366.
- (14) Пыляев М.И. Забытое прошлое окрестностей Петербурга. С 104 гравюрами. С.-Петербург: Издание А.С. Суворина, 1889. 550 с.
- (15) 筆者が使ったこの「ホールвокзал【現代では駅の意】」は、本来、「воксал」と書かれていた。ウラジール・ダーリの大辞典によると、この言葉は英語起源で、「会堂、宴会場、集会場、普通音楽が演奏される」と説明されている。(Даль Владимир. Толковый словарь живого великорусского языка: В 4 т. Т. 1: А-З. М.: Терра, 1994. С. 232) ロシア語のこの「воксал」は英語の「Vauxhall」からきている。ロシア語の「Вокс」すなわち英語だと「Vaux」は1760年、大衆娯楽のための園と演劇上演のためのホールを造った経営者の名前である。「Vauxhall」はロンドン近郊にあり、大衆に大変な人気を博したが、これが、ロシアでは一般名称になり、「воксал」と転記された。1838年5月Санクト・ペテルブルグからバブロフスクまで、鉄道が敷かれ、そこに有名な建築家А. I. ШютакенШюнеЙдел【А.И. Штакеншнейдер】の設計によるコンサート・ホールと駅舎が造られ、後者は「воксал」と名づけられた。後に列車を待つ旅客のための駅舎が、やはり「вокзал駅」と名づけられた。もはやその内部でコンサートは行われなかったのだが。
- (16) Там же. С. 11-12.
- (17) Русский биографический словарь. Ибакъ - Ключаревъ. С.Петербург: Типография Главного Управления Уделов, 1897. С. 64.



- (18) Библиотека для чтения. Журнал словесности, наук и политики, издаваемый под редакцию А.Ф. Писемского. Двадцать-девятый год. Июль. Том сто-семьдесят-второй. Санктпетербург. В типографии отдельного корпуса внутренней стражи. 1862. Внутреннее обозрение. С. 150-151.
- (19) Библиотека для чтения. Журнал словесности, наук и политики, издаваемый под редакцию А.Ф. Писемского. Двадцать-девятый год. Том сто-шестьдесят-девятый. Санктпетербург. В типографии штаба отдельного корпуса внутренней стражи. 1862. Фельетон. Пестрые заметки. С. 144-145.
- (20) 保田孝一「ペテルブルグの福沢諭吉」『福沢諭吉年鑑』第17巻 1990年 47-72頁。
- (21) 鈴木健夫、ポウル、スノードン、ギュンター、ツォーベル『ヨーロッパ人の見た文久使節団』早稲田大学出版部2005年 174-176頁。
- (22) Достоевский Ф.М. Преступление и наказание//Собрание сочинений в 7 тт. Т. 2. М.: LEXICA, 1994. С. 149. 【当該部分、翻訳は訳者。米川訳の引用ではない。原本は以下で確認。Достоевский Ф.М. Преступление и наказание//Собрание сочинений в 8 тт. Т. 7. М.,2004 Ф.М. Достоевский; Преступление и наказание: рукописныередакции/[редактор VII тома В.В. Виноградов] (Полное собрание сочинений в тридцатитомах/Ф.М. Достоевский; [редакционная коллегия: В.Г. Базанов (главный редактор) и др.] Художественные произведения; т. 7), Ленинград, Изд-во “Наука” Ленинградское отд-ние, 1973, 414с., Преступление и наказание, [редактор VI тома, В.В. Виноградов] (Полное собрание сочинений в тридцатитомах, [редакционная коллегия: В.Г. Базанов (главный редактор) ... и др.]; Художественные произведения; т. 6), Ленинград: Изд-во “Наука” Ленинградское отд-ние, 1973, 421с.,) Преступление и наказание, (Собрание сочинений в пятнадцатитомах/[редакционная коллегия, Г.М. Фридлиндер ... и др.]; 5), Ленинград: “Наука”, 1989, 573 с., Преступление и наказание/Константин Харabet (Право и культура), М., РИПОЛ классик, 2012, 430с. Достоевский 『罪と罰』第1巻、米川正夫訳、世界文学全集26、河出書房、1958年267-268頁、同、 Достоевский全集15、1962年、河出書房146頁、世界文学全集10 河出書房新社、1965年160頁参照】
- (23) Достоевский Ф.М. 『罪と罰』米川正夫訳 世界文学全集10 河出書房新社、1965年 160頁。
- (24) 野澤郁太「遣欧使節航海日録」『遣外使節日記纂輯』第2巻所収 1929年200頁、1965年586頁。
- (25) 日記では「酉」と書かれている。これは午後5時から7時の間に当たる。今日の言葉ではむしろ午後6時であろう。
- (26) 皇帝アレクサンドル二世 (1818-1881) の命令により、皇帝の住まいである冬宮の近くにある離宮【Запасной дворец 「予備の宮殿」の意味】が、日本語では「旅館」という、日本式のホテルに建て替えられた。
- (27) 1町はおおよそ60間、あるいは360尺で109.9mにあたる。
- (28) 1間は1.81メートル、従って、150間は271メートルにあたる。
- (29) 【原文は】「長線」と書かれているが、読みを確定することができなかった。一応、ひとつの案として「ちょうせん」と読める。長い線の意味である。野澤郁太は瓦斯燈までガスを引く線を見たのかもしれない。当時はまだ電燈がない。【野澤の原文は「後庭中に出れば満庭上に長線を田字囲字の如くに引て之に数百の挑燈を點す】
- (30) 1尺は30.3センチメートル。
- (31) 1寸は3.03センチメートル。
- (32) 【「深夜2時」の原語は】「丑牌頃」。丑牌頃とはだいたい深夜1時から3時までの時間。この場合、恐らく、午前1時過ぎであろう。
- (33) 市川清流「尾蠅欧行漫録」『遣外使節日記纂輯』第2巻所収 1929年 468-470頁。
- (34) Новый устав Императорского Санктпетербургского Яхт-Клуба. Санктпетербург: В типографии Второго Отделения Собственной Его Императорского Величества Канцелярии, 1858. С. 3.
- (35) Пыляев М.И. Забытое прошлое окрестностей Петербурга. С 104 гравюрами. С.-Петербург: Издание А.С. Суворина, 1889. С. 27.

- (36) Императорский Речной Яхт-Клуб 1860-1910. Очерк деятельности С.-Петербургского Речного Яхт-Клуба за 50 лет 1860-1910. Т. 1. С.-Петербург: Тип. М.Д. Ломковского, Думская улица, д. № 5. 1910. С. 10.
- (37) Там же. С. 11.
- (38) Императорский Речной Яхт-Клуб 1860-1910. Очерк деятельности С.-Петербургского Речного Яхт-Клуба за 50 лет 1860-1910. Т. 1. С.-Петербург: Тип. М.Д. Ломковского, Думская улица, д. № 5. 1910. С. 5.
- (39) Там же. С. 19-20.
- (40) Там же. С. 20-21.
- (41) Там же. С. 57.
- (42) Кронштадтские ведомости. № 63. Среда, 8-го августа, 1862 г. С. 265.
- (43) Кронштадтские ведомости. № 64. Пятница, 10 августа, 1862 г. С. 270.
- (44) 1 間は1.81メートル。
- (45) 1 里は3,927キロメートル。
- (46) 高島祐啓「欧西紀行」(Путевые заметки по европейским странам). Отдел рукописей парламентской библиотеки [Японии], шифр 831/10/97. Тетрадь 19-я. с. 2-5. Подробнее об этой рукописи см.: Климов В.Ю. Дневник Такасима Ю:кэй “Путевые заметки по европейским странам”//Orientalia et Classica. Труды Института восточных культур и античности 【クリモフ「高島祐啓の日記「欧西紀行」」参照】. Выпуск LII. История и культура традиционной Японии 7.Отв. редактор А.Н. Мещеряков. М.: Наталис, 2014. С. 286-306.
- (47) Правила для гонок гребных судов Речного Яхт-Клуба/Морской сборник, издаваемый под наблюдением морского ученого комитета. Том LII. № 3. Март. Санктпетербург: В типографии Морского Министерства, 1861. [Раздел] Смесь. С. 18-22.
- (48) Там же. С. 18.
- (49) Там же. С. 19.
- (50) Там же. С. 19.
- (51) 「(+) Правила эти можно получить в магазине эстампов Беггрова, на Невском проспекте № 4, и у швейцара клуба.】【このプログラムには、以下のような註記があった。内容は】「(+) この規定はネフスキー大通り4番にあるベグロフ銅版画店、あるいは、クラブの守衛所で入手できる」
- (52) Правила для гонок гребных судов. С. 20.
- (53) Там же. С. 20-21.
- (54) Там же. С. 21.
- (55) Там же. С. 22.
- (56) Гонка гребных судов. 1862. С. 337.

(訳者注)

- i [ ] は略記に対するクリモフ注。以下同様。
- ii 【 】 は翻訳者の注。以下同様。
- iii マースレニツァとは、カトリックではカーニバルと呼ばれるものに類する春を迎える祭り。40日間もの精進潔斎を要する大齋期直前の最後の週、謝肉祭の週に当たり、1週間続く。古代スラヴの異教文化の内、唯一ロシア正教に認められたもので、つばめやひばりの訪れとともにやってくる、待ちに待った春が祝われた。とはいえ、暦の関係で、年によって時期がかなり違うものの、ロシアでは、戸外はまだ、雪解けはしておらず、厚い防寒着のままとなる。帝政時代は、特に、華やかに祝われ、盛大に、そり遊び、トロイカ乗り、雪合戦、拳闘、おしくらまんじゅう、親族訪問が行われた。肉食は禁じられているが、バター、チーズ、卵、サワークリーム、ピローク等は許されており、1週間すべての日に「出会いの日(月)」、「祭りの始まる日(火)」、「ご馳走の日(水)」、「豪勢な木曜日」、「妻

の母にお呼ばれるする日（金）」、「夫の姉妹の元に集う日（土）」、「見送る日、別れの日曜日」と名前が付く。笑い話、しゃれ、歌、小話、諺も多く、「マースレニツァ」といえば豪華な生活を意味する。「全財産を質に入れても祝うのは当然（諺）」の日であり、「娘婿が来る日には、家中がバターだらけになるほどたくさんの料理をするのは当然（諺）」であるとされた。「バター祭り」の意味。ロシア国立美術館に所蔵されるボリス・ミハイロヴィチ・クストディエフ作「マースレニツァ」（1916）、レオニード・イヴァノヴィチ・ソロマトキン「マースレニツァ」（1878）、コンスタンチン・エゴロヴィチ・マコフスキー作「マースレニツァの時期の民衆の遊び サンクト・ペテルブルグ、アドミラルチェイスキー広場」（1869）等が当時の様子と雰囲気を伝える。なお、クストディエフは「マースレニツァ」と題する作品が数点ある。この箇所は、このような背景を元に考えれば、理解しやすい。ソ連時代は家庭で祝われる程度の簡素なものになったが、現代では、また、村や町を挙げての陽気で騒がしい行事に戻りつつある。ただし、持ちより料理は、完全に手作りせず、購入、あるいは、少し手を加えただけの人も多い。